

小学校音楽科音楽づくり授業における教師と児童の発話分析

和歌山大学教育学部：(研究代表)上野 智子 菅 道子 宮橋小百合
和歌山大学教育学部附属小学校(和歌山大学教職大学院)：北川 真里菜

1. 研究の趣旨と経過

本取組は、大学教員と小学校教員とが連携し、小学校音楽科の教材開発ならびに授業づくりについての実践的研究を行うことを目的として、共同研究を行うものである。

今年度は、現職教員が教職大学院に在籍し、自らの実践そのものを見返す機会を得たことから、音楽科授業における教師の役割についての検討を行いたいと考えた。

今年度の取り組みは以下のとおりである。

回	年月日	概要
1	2021年4月25日	附属小学校にて北川の歌唱授業の参観・協議
2	2021年7月5日	附属小学校にて北川の音楽づくり授業の参観・協議
3	2021年10月17日	附属小学校にて北川の音楽づくり授業の参観・協議
4	2021年11月6日	オンラインにて北川の音楽づくり授業の協議会
5	2021年12月6日	附属小学校にて北川の音楽づくり授業の参観・協議

研究についての概要は、以下に示す。

2. 音楽づくり授業の発話分析

2-1. 研究の目的

これまでの連携事業では、北川が行った授業実践をもとに、小学校音楽科の音楽づくり授業におけるICT機器やプログラミング活用、その分析方法の在り方の検討を行ってきた。

その中で、プログラミングを活用した音楽づくり授業が成立する要件として、教師の指導力等の様々な条件が備わっているのではないかと考えた。特に、音楽づくりの過程における教師の言葉がけや問いかけ、価値付け等は作品の出来に影響を及ぼしたり、児童の思考を深めたりする可能性があることから、音楽づくりの授業において重要なものであると考えられる。

そこで、音楽づくりの過程における教師と児童の発話分析を行い、教師の発話によって児童がどう反応したのか、また双方のやり取りによって音楽がどのようにつくられていったのかを明らかにすることで、音楽づくりの過程における教師の役割について示唆を得たいと考えた。

音楽科における教師の発話分析に関する研究事例は、谷本(2017)が挙げられる。教師の発話内容を22項目に分類して教師の働きかけを分析し、音楽の授業改善を図っている。しかしながら、教師の発話による児童の思考の深まりや作品の変容については明らかになっていない。そこで本研

究(2022年度)は、教師の発話による児童の思考の深まりや作品の変容の解明に向けた基礎研究として、次の2点を実施した。第1に、先行研究である谷本(2017)の分析手法を用いて、北川の授業(音楽づくり)における教師の発話傾向を検証し、先行研究との比較を行う。第2に、教師と児童の相互のやり取りの分析から、音楽づくりにおいて児童が思考を深めたり、作品を改変したりするような教師の言葉かけの特徴を明らかにする。

2-2. 分析方法

分析対象は、音楽づくり授業実践「廃材楽器でSDGs－打楽器の音楽をつくろう－」(全6時間)の第2次3時間目である。本授業実践は、北川が和歌山大学教育学部附属小学校3・4年複式学級児童(16名)を対象に、2022年12月6日に行ったものである。本実践では、総合的な学習の時間で収集している廃材を用いてオリジナル打楽器を作成し、教育芸術社の教科書教材(4年)「打楽器の音楽づくり」に取り組んだ。3人または4人1組となり、強弱が図式化された4種類の図形カードの組合せを工夫し、音色や音楽の縦と横との関係を拠り所とし、反復等の音楽の仕組みを用いて思考・判断しながら音楽をつくる活動である。音楽づくりは、DeNAプログラミングソフト「プログラミングゼミ」を活用して行った。プログラミングゼミには教科書準拠のプログラム(図1)が準備されており、これらの図形カードをドラッグ&ドロップで直感的に移動させたり音楽を再生したりすることができ、修正も容易である。

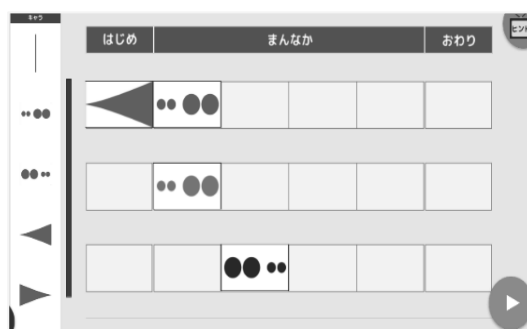


図 1 プログラミングゼミ「打楽器の音楽づくり」画面

本時は、上述したオリジナル打楽器を用いたリズムアンサンブルづくりであり、教師と児童の発話をビデオカメラで録画し、逐語記録を起こした上で発話分析を行った。ビデオカメラは、教師用ワイヤレスマイクと接続した定点の俯瞰カメラを1台、グループ内の会話が撮影できるよう各グループに1台ずつ用意した。教師の発話は俯瞰カメラから取り出したものである。

発話分析では、まず初めに、前述の谷本(2017)による22項目の発話分析項目一覧(p.28)を参考に、1授業(45分間)の教師の発話を分類する。続いて、グループでの音楽づくり(約30分間)に着目し、教師の発話を受けて生じた児童の発話を分析することで、教師の言葉かけの特徴を明らかにする。

2-3. 分析結果と考察

1授業(45分間)における教師の発話を分類したところ、全体の21%が「思考の促し」に関する問いかけであった。この「思考の促し」とは、「表現や取組について問いかけ考えさせる」ものである(谷本、2017、p.28)。

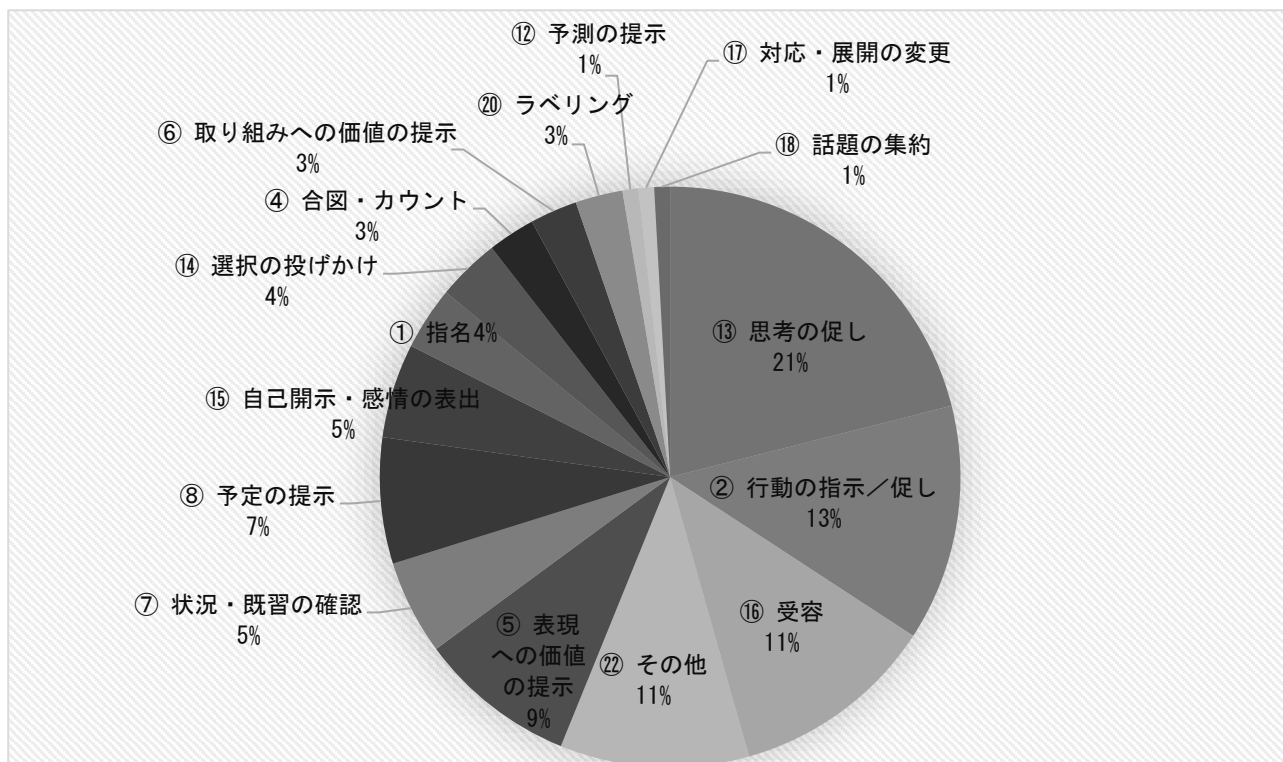


図 2 教師の発話内容 分類別割合

谷本(2017)は、歌唱・器楽分野と比較して、音楽づくり授業では「子どもとのやりとりによって進行し、教師の発話に『状況・既習の確認』『思考の促し』『受容』が多く見られた」としている(p.26)。図2の結果においても概ね同様の傾向が見られた。なお「行動の指示/促し」は、プログラミングの機器操作に関するものであった。

そこで、発話記録をもとに、どのような教師の「思考の促し」があり、児童がどのように音楽をつくっていったのかについて、具体例として次の2場面の発話記録を基に考察する。

(1) グループDへの働きかけ

グループDは、「楽しくなる音楽」をテーマに音楽をつくっていた。

発話記録の波線部分が、「思考の促し」に関する発話である。

児童の考えを「受容」した後、教師は波線部①のように、児童の思いや意図を引き出そうとしている。根拠を言語化させることによって、立ち止まって考え直したり考えを明確化したりすることができる。児童がカードを埋めないことの利点を答えた後、さらに教師は②のように児童の言葉を言い換え、児童の思考に揺さぶりをかけている。③は、設定したテーマに立ち返らせるため、また曲想と音楽の構造との関わりについて考えさせるための発話である。このような「思考の促し」によって、児童C3

は「つまり」と発しているように、グループ全体の意見を集約し、児童らは自分たちのつくりたい音楽、すなわち「間」（休み）を入れることによって音楽の盛り上がりの変化をもたせるというように、テーマである「楽しくなる音楽」を具体化していったと考えられる（図3）。

T: (ワークシートのメモを消しているのを見て) おー、消しているね。

C1: さすがに、(カードを) 埋めすぎてもちょっとあかんかなあーって思って。

T: そうなんや。①なんでそう思ったの?

C1: 埋めすぎたらさ、ずっと叩いとかなあかん。休み入れたほうがけっこうおもしろい。

T: そうなんや。②フル活動はあかんの?

C2: うん。〈頷く〉でも最後だけはみんないっしょにするとか。

T: あー。さっきのみたいにね。③そのほうが楽しくなるの?

C2: うん、楽しくなる。〈頷く〉

C1: つまり、(休みを入れないと) 俺らにとっては5分休憩も休み時間もなしみたいになっちゃう。

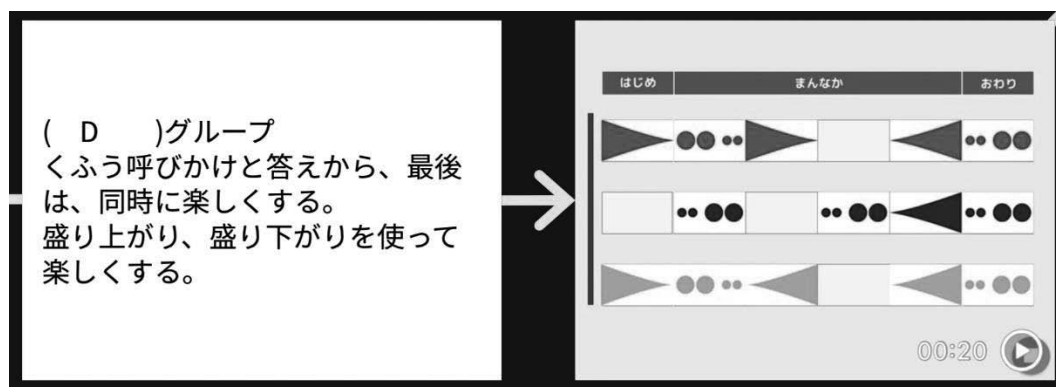


図 3 グループD 完成作品と工夫の記述

(2) グループBへの働きかけ

グループBは、「だんだん盛り上がる音楽」をつくりたいと考えていた。発話記録の波線部分が「思考の促し」に関する発話である。

C1: 重ね方の工夫は、呼びかけとこたえ。

T: うんうん。④呼びかけとこたえを(どんなふうにしたの)...?

C1: 呼びかけを大きくしました。

T: あーそうなんや。

T: ⑤なんで?

T: ⑥そのほうが盛り上がるの?

C1: 盛り上がるから。あっ、でも...

C2: もう一回聴いてみよう。

C1: こたえのほうが(こたえを大きくしたほうが)いいのか...?

〈再生する〉

C1: 呼びかけを小さくしてこたえを大きくしたほうがいいんじゃない? だんだん盛り上がっている感じが出る。

このグループでは、当初「呼びかけ」は多くのカードを重ねて「大きく」(強く)していた。波線部④では、児童の工夫を「受容」しながらも、その内容について引き出そうとしている。⑤⑥は、③と同様に、設定したテーマに立ち返らせるため、また曲想と音楽の構造との関わりについて考えさせるための発話である。児童はこの発話を受けて、「本当に盛り上がる感じの音楽に近付いているのか」について立ち止まり、「こたえ」の部分強くした方が良いのではないかと考えを再構成している。その結果、「呼びかけ」は重ねるカード数を少なくして弱く、「こたえ」はカードを多くして強くすることで、終わりに向かって「盛り上がる感じ」を表現しようとして作品をつくっていったことがわかる(図4)。

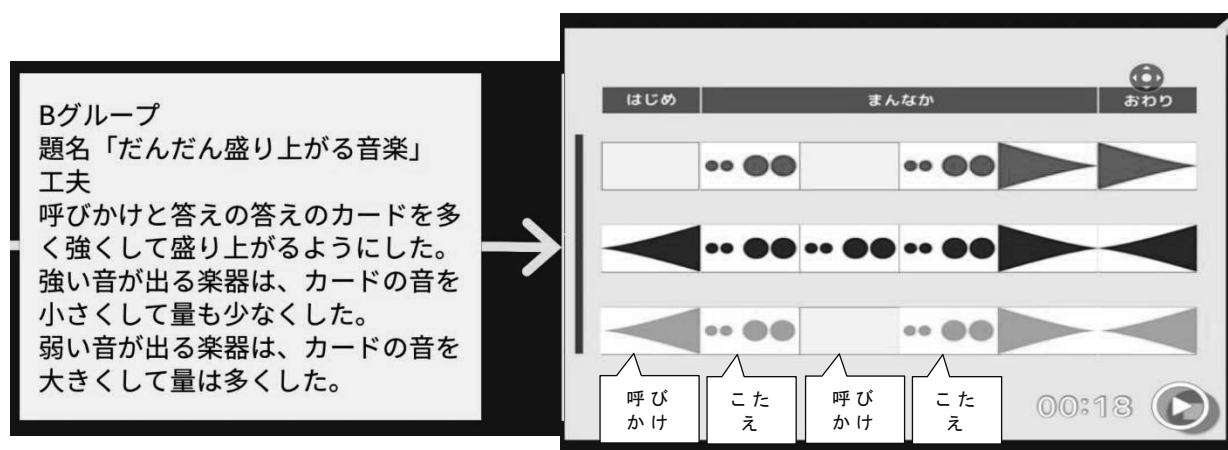


図 4 グループB 完成作品と工夫の記述

3. 実践の成果と課題

先行研究(谷本、2017)の分析と同様に、発話傾向として「思考の促し(表現や取組について問いかけ考えさせる)」や「受容(子どもの言葉や表現等を受け止める)」に関する語が多く見られた。

その中で、最も発話率が高かった「思考の促し」についての分析結果から、このような発話を行うことで、児童の思いや意図を引き出したり、児童がテーマに立ち返って音楽をつくれたりすることがわかった。これは、発問によって「揺さぶり」や「問い返し」を行う他教科の授業とも共通する部分であり、音楽づくりの授業においても重要な発話であることが再認識された。

一方で、「表現への価値付け」や「既習事項の確認」などは、音楽づくりの専門性がなければできない難易度の高い発話であることが考えられる。教師がどのような価値付けや、既習との関連付けを行っているのかについて検討することは、音楽づくり授業における教師の役割について示唆を得るために有効であると考えられる。本研究を足掛かりとして、音楽づくりにおける教師のどのような言葉かけが児童の思考の深まりや作品の変容に影響を与えるのか、その特質を明らかにできるように研究を深めていきたい。

4. 参考文献

谷本直美(2017)「教師の発話分析からみる『音楽づくり』の新しい意義－歌唱・器楽分野と比較して－」『桐蔭論叢(37)』、pp.21-28